

1. 海洋環境変動調査

太田太郎

目的

本県沖合の魚群の回遊状況の推定，漁場形成の予測に必要な海洋環境の調査等を行う。

方法

試験船第一鳥取丸（199 トン）を使用して，本県沖合に設定した沿二-2 線（図 1）で 2，8，10 及び 12 月に，沖合-2 線（図 2）で 9 月と 11 月に海洋観測を実施した。稚沿岸二-2 線（図 3）で 4 月と 5 月に，稚沖合二-2 線（図 4）で 3 月と 6 月に海洋観測とノルパックネットを用いた水深 150m 深から（150m 以浅の場合は海底直上から）の鉛直曳きによる卵・稚仔の採集を行った。す-1 線（図 5）で 7 月に海洋観測とスルメイカ釣獲試験を行った。

海洋観測は CTD（アレック電子 AST-2016）を使用し，全点で表面から 500m まで（500m 以浅の場合は海底直上まで）の水温・塩分を測定し，さらに水深 1,000m を超える 1 点で 1,000m まで測定した。ただし，表面水温は棒状水温計により計測した。塩分については，全点で表層をバケツ採水し，その試料を持ち帰り，サリノメータ（ギルドライン Autosal8400B）で検定した。

結果

定線観測は，全ての月で計画どおり実施した。

定線観測の代表点（観測点：36.00' N，133.40' E）による表面から水深 100m 深までの月別水温変化を調べた。また，栽培漁業センターヒラメ親魚池の午前 9 時の水温を毎日計測した。定線観測の代表点による表面から水深 100m 深までの月別水温変化及び栽培漁業センターヒラメ親魚池での水温定置観測結果を図 6 及び図 7 に示した。

隠岐諸島周辺海域での本年の海況は以下のとおりであった。沿岸の表面水温は，夏季から秋季にかけては平年より高めで推移し，11 月以降は低めで推移した。50m 深水温は，6 から 11 月にかけて

は平年より高めで推移し，12 月に入り平年より低めに転じた。100m 深水温は，6 から 9 月にかけては平年より高めで推移し，12 月に入り平年より低めに転じた。

今年は島根沖冷水，山陰若狭沖冷水とも，春季は勢力が強く接岸傾向にあったが，夏季以降離岸傾向にあり，勢力も弱まった。

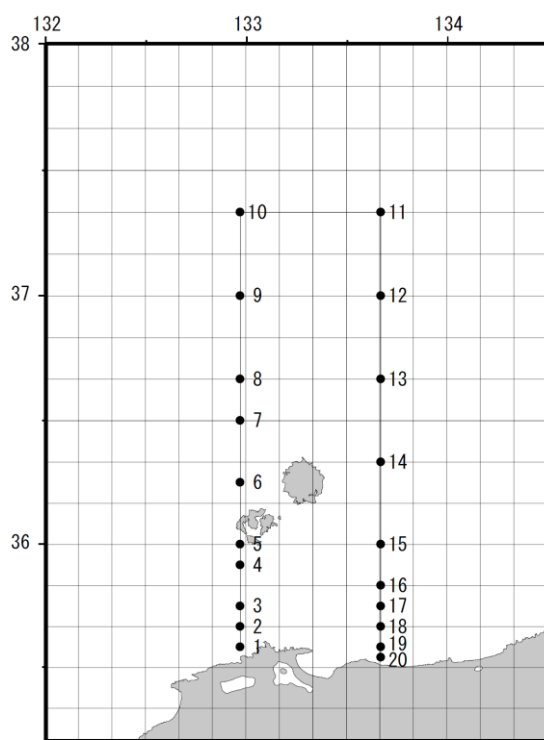


図1 沿岸観測定線（沿二-2）

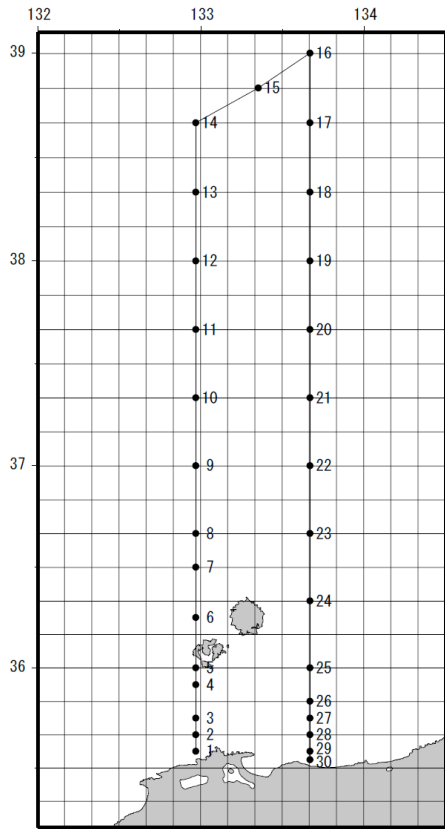


図2 沖合海洋観測線（沖合一2）

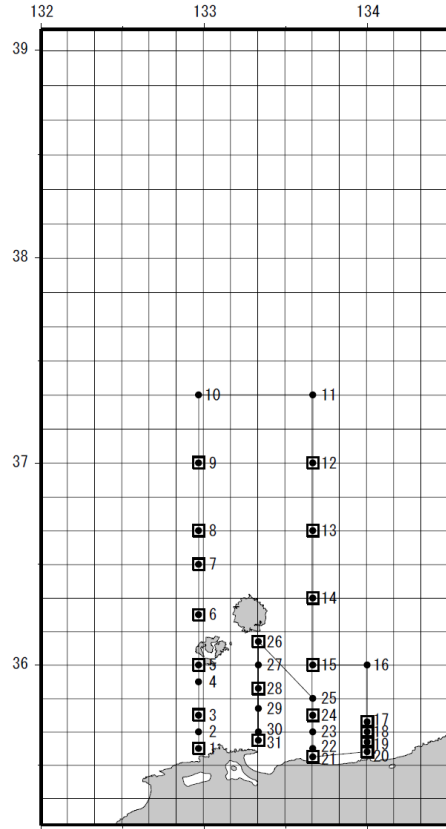


図3 沿岸稚魚調査定線（稚沿岸二一2）

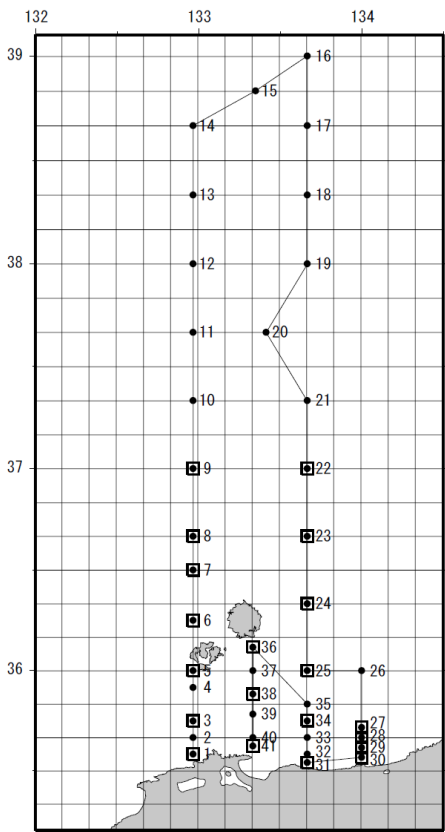


図4 沖合稚魚定線（稚沖合二一2）

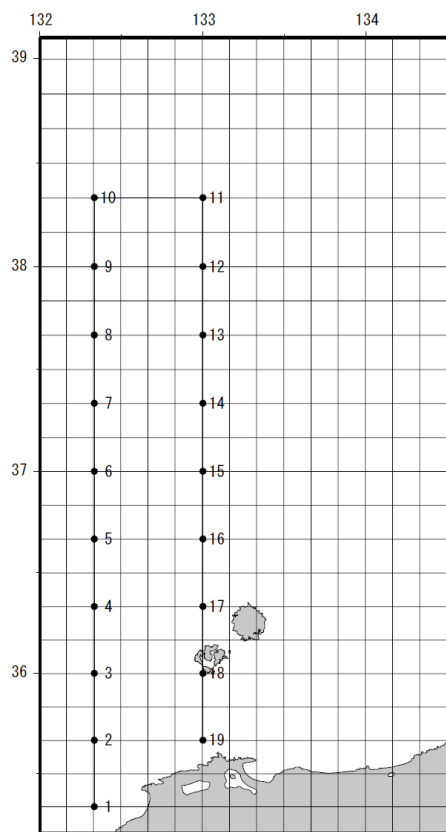


図5 スルメイカ漁場一斉調査定線（す一1）

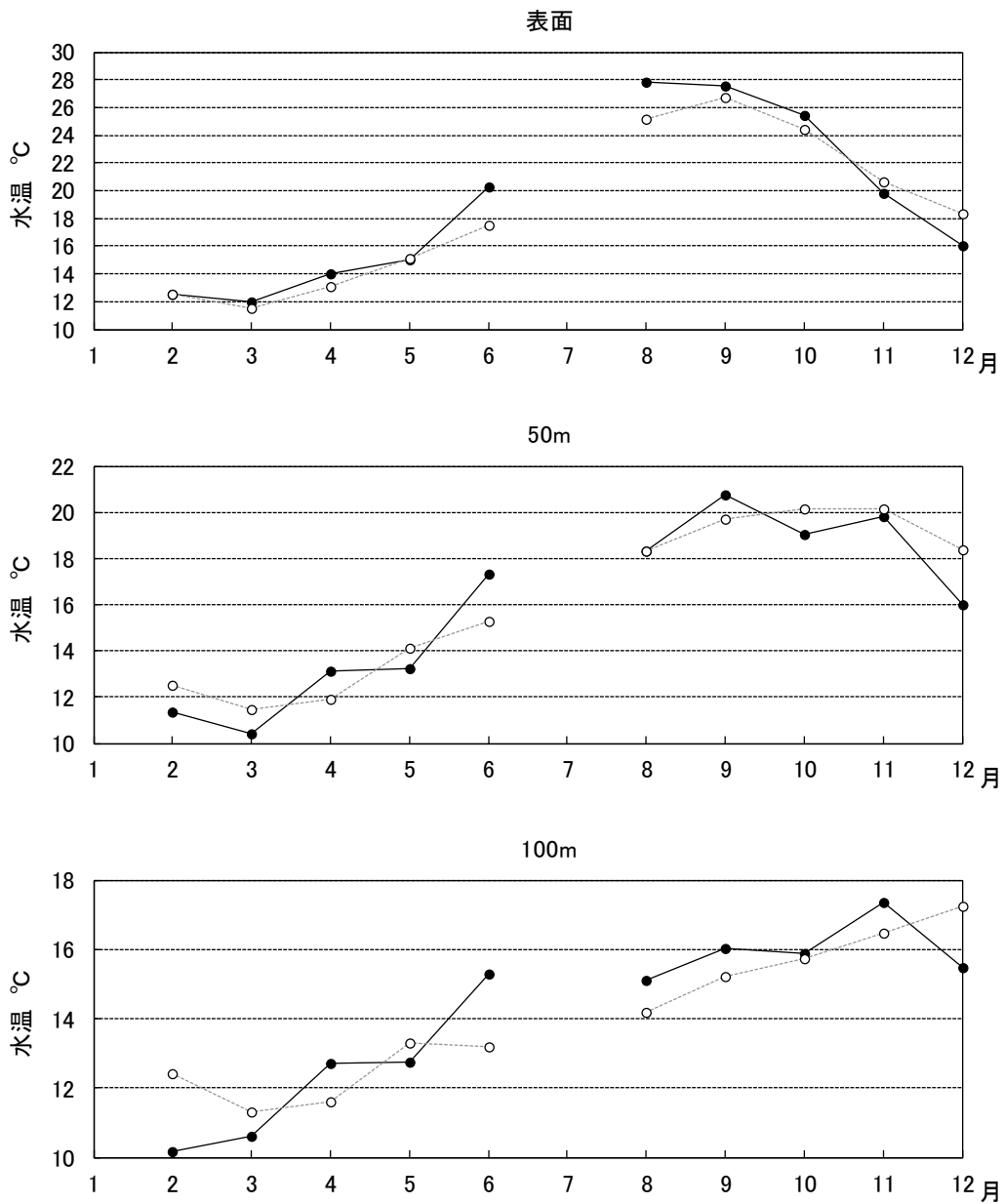


図6 定線観測による赤碕沖の月水温変化
上から表面, 50m深, 100m深 ●:2012年;○:平年

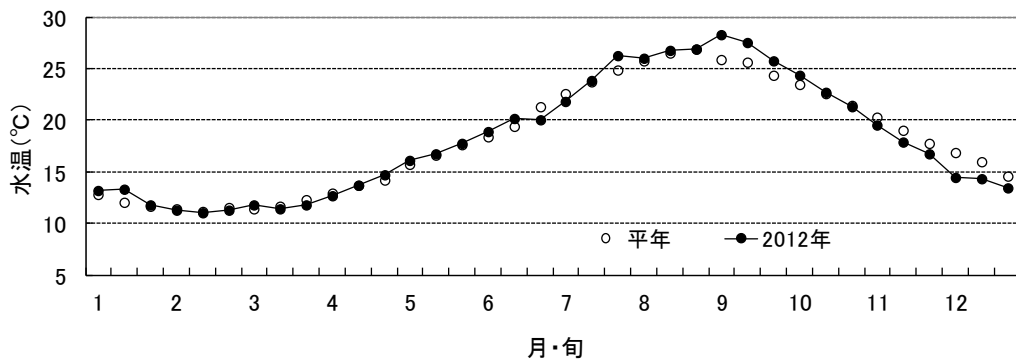


図7 栽培漁業センターヒラメ親魚池の旬平均水温の変化